

当事者参画型開発の手引き

日本認知症官民協議会

認知症イノベーションアライアンスワーキンググループ

目次

はじめに	P1
当事者参画型開発に取り組む意義	P3
当事者参画型開発をはじめるとのキホン	P5
一般的な開発プロセスと当事者参画型開発のプロセス	P7
認知症の人に参画してもらう手法	P8
当事者参画型開発のプロセス1：認知症の人と出会う	P16
当事者参画型開発のプロセス2：企画の目的・内容を伝える	P19
当事者参画型開発のプロセス3：参画してもらう際の事前準備	P21
当事者参画型開発のプロセス4：当事者参画を実践する	P23
4-1 コミュニケーションの工夫	P24
4-2 空間づくりの工夫	P28
4-3 資料づくりの工夫	P31
4-4 オンライン開催の工夫	P33
当事者参画型開発のプロセス5：フィードバック	P35
企業の取り組み事例	P37
巻末参考資料：認知症についての基礎知識	P47
巻末参考資料：認知症の人の視点や暮らしの様子を学ぶ情報	P51

はじめに

● 本手引きの目的

認知症及び MCI（軽度認知障害）の人の数は、2040 年には合計約 1,200 万人（認知症約 584 万人、MCI 約 613 万人）に達し、65 歳以上の高齢者の約 3.3 人に 1 人を占めると推計されています。令和 6 年 1 月に施行された「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」に明記されている「認知症の人を含めた国民一人一人がその個性と能力を十分に発揮し、相互に人格と個性を尊重しつつ支え合いながら共生する活力ある社会（共生社会）」の実現に向けては、日々の困りごとのサポートや、やりたいことの実現に資する誰もが使いやすい製品・サービスを充実することが目指される時代となりました。

認知症の人一人ひとりが個性と能力、これまでの経験を活かしてチャレンジする動きが全国各地ですこしずつ始まっていますが、認知症の人が参画した製品・サービスの開発の動きはこれまでほとんどみられませんでした。認知症の人のニーズが、開発を行う企業に届いていないことや、認知症の人への企業による固定観念等もその要因として考えられます。そこで注目されるのが、認知症の人が企業の開発プロセスに「参画」し、企業と「共創」を行う「当事者参画型開発」*1 です。

本手引きは、「当事者参画型開発」の普及・拡大を目的として、実践の中から得られた気づきをもとに、「当事者参画型開発」を行う際に参考となる工夫やヒントを整理しています。

● 本手引きにおける「当事者参画型開発」とは

「当事者参画」とは、「製品やサービスに対するニーズをもつ認知症の人自身が、協力の意思を持って、それらの製品・サービスの開発プロセス（企画、実施、評価等）に『参画』すること」と定義しています。また、ここでの「開発」は新しい製品・サービスの創出だけではなく、既存の製品・サービスを認知症の人の意見をもとに改良することも含みます。

● 本手引きの活用における留意点

実践において求められる工夫の具体的な内容は、一般的な開発プロセスと同様に、参画する認知症の人一人ひとりの思いや状況、開発する製品・サービスの類型等によっても異なります。したがって、認知症の人の意見を聴き、対話しながら、取組を行うことが原則となります。



「新しい認知症観」対等な個人、消費者として

認知症になると「何もわからなくなる」「理解できない言動が増える」「一人では何もできなくなる」。そんなイメージをもっていますか？ これらは、認知症の人への先入観や偏見、つまり「古い認知症観」と言わざるを得ません。

認知症の症状は多様で、一人一人異なります。実際には、認知症になり、日常生活で困ることが出てきても、工夫しながら、自分らしい暮らしを続けている認知症の人は多くいます。そこにいるのは「認知症の〇〇さん」ではなく、様々な人生経験を積んできた〇〇さんが、認知症とともに生きている姿です。

2024 年 12 月に閣議決定された政府の「認知症施策推進基本計画」（以下、基本計画）では、「新しい認知症観」として「認知症になったら何もできなくなるのではなく、認知症になってからも、一人一人が個人としてできること・やりたいことがあり、住み慣れた地域で仲間等とつながりながら、希望を持って自分らしく暮らし続けることができる」という考え方を示しました。

基本計画では、企業や団体等が、自らウェブ上で「認知症バリアフリー宣言企業」として宣言を行うことを通じて、認知症の人やその家族にとって安心して店舗やサービス・商品を利用できる環境の整備などに努めるといった取り組みを進めていくことも盛り込まれています。企業もまた、「新しい認知症観」に基づいて対応をしていくことが求められています。認知症の人を、一人の尊厳のある個人、そして消費者として捉えていくことが大切です。

*1 経済産業省では、共生社会の実現を目指し、認知症の人が主体的に企業や社会等と関わり、認知症の人の真のニーズをとらえた製品・サービスの開発を行う「当事者参画型開発」の普及と、その持続的な仕組みの実現に向けた取組である「オレンジイノベーション・プロジェクト～認知症当事者をつくる、誰もが生きやすい社会～」を推進しています。

当事者参画型開発に取り組む意義

Episode

「認知症の人との当事者参画型開発って…？」



食料品メーカー△△企業の新規開発部門で働くツトムさん。
認知症の人と共創し誰もが使いやすい製品・サービスを
開発できないかと考えています。
認知症の人の声を聴きながら、取り組んでいきたいのですが…

● 企業にとっての意義

認知症の人との共創を通じて、潜在的な利用者・顧客の声を聴きながら開発を行うことにより、幅広いニーズに即した製品・サービスの提供や企業価値の向上に向けて必要となる新たな視点を得ることができます。企業の開発担当者にとっては、認知症の人の真のニーズに気づき、新たな製品・サービスの開発だけではなく、既存の製品・サービスの改良につながるヒントを得ることができる機会になります。また、認知症の人と共創し誰もが使いやすい製品・サービスの開発により、売上の向上だけでなく、企業イメージの向上、従業員の充実感や達成感等の効果も期待できます。

実際に「当事者参画型開発」の実践を進めている企業から取組の意義について以下のような声があげられています。



これまで個社ではアプローチできなかった当事者の協力を得られたことでスピード感を持った開発を進められた。



認知症の人や支援者、家族とつながり、直接様々な意見を聞くことができたことで、よりユーザー目線で開発を進めることにつながった。



対話を通じて、自分たちの思い込みを取り払うことができ、開発の新たな視点の気づきに繋がった。



「当事者参画型開発」の経営面の効果について

2023年度、経済産業省が事務局を務める「認知症イノベーションアライアンスワーキンググループ」の活動の一環として、当事者参画型開発を実践することにより企業に生じる効果の検証が実施されました。当該検証を通じて、社内への効果、社外への効果、その他の効果の3類型で効果が抽出・リスト化されました。

詳細は、「認知症イノベーションアライアンスワーキンググループ」令和5年度第1回事務局資料*2のp25～26をご参照ください。

*2 https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/ninchisho_wg/pdf/2023_001_03_00.pdf

● 認知症の人にとっての意義

企業との共創を通じて、認知症とともに生きる経験や知見を還元することにより、自らが「ほしい」と思うものが形となり、やりたいことの実現や困りごとの解決につながります。また、企業との共創が多様な関係者との出会いや新たな社会との接点を構築する機会となることが期待されます。

実際に企業の開発に参画した認知症の人から取組の意義について以下のような声があげられています。



みんなで話すことは、これまでにあまりなかったが、今日はみんなと一緒に多くの話ができた。自分でもみんなと一緒にいろんなことをしていいと分かって、とても楽しかった。



自分の思いを企業と話し合える場があることがとても嬉しかった。



こんなものがあたらいいなと思っていた製品がこれから開発されて、買えるようになることがとても楽しみ。



「共創」では、共に取り組む者同士がパートナーとして関係をつくりながらいい時間を過ごし、進めることが大切です。

当事者参画型開発をはじめるときのキホン

Episode 「一緒に取り組めたらいいけど…認知症の人と接したことがないから心配」



少しずつ認知症に関する知識を学ぶツトムさんですが、身近に認知症の人がいないので、実際に会って何か一緒に取り組むにはまだ心の準備ができていません。

そこで、認知症の人の会を運営し、本人や支援者のネットワークをつくっているトモミさんに連絡して相談をしました。

共創にむけたアプローチ

キホン 1 認知症の人との出会いを楽しみながら、まずやってみる

人と人として出会いや会話を楽しみ、関係性を育んでいく。ハードルを高くしすぎず、まずチャレンジをしてみる、わからないことはその度にコミュニケーションをとることで解消をしていく。

キホン 2 「認知症」を一括りにしない

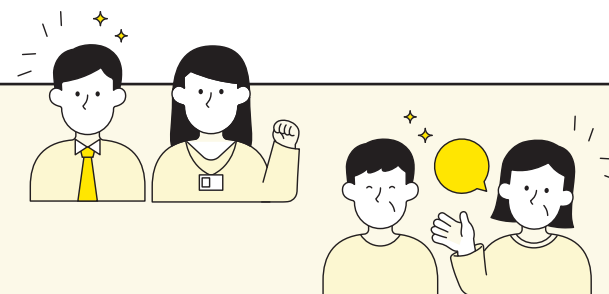
認知症について自分が持っている先入観やイメージがあることを自覚し、それに囚われない。心地よく感じるやりとりや環境は人によって異なるため、お一人ずつ相談しながら進める。認知症について必要な知識は、その都度学んでいく。

キホン 3 認知症の人の意思を尊重する

「認知症だからこうした方がいいはず」「これはできないだろうから周りが手助けしよう」などと勝手に決めつけない。まずは認知症の人との対話を通して、認知症の人に聴き、一緒に取り組んでいく。

認知症の人とともに取り組むときのキホン

認知症の人と対話し、協働をしていく上で、チーム全員が持っておきたい心構えです。どのような関わり方をする場合でも、いつも心に留めておきたいものです。



キホン 4 認知症の人と”チーム“として取り組む

認知症の人と企業が対等に納得のいく対話ができるように、一対一の関係性を築くことを大切にする。「聞きっぱなし」にせず、製品・サービスの開発に反映できたこと、できなかったこと、その理由等を含めて、認知症の人と取組の進捗を定期的に共有する。

キホン 5 認知症の人にわかりやすく「伝える」・「伝わる」ことを意識する

対話し、協働をしていく前提として、企業の考えや思い、製品・サービスのアイデア等を参画する認知症の人にわかりやすく、簡潔に「伝える」ことが必要。「伝える」・「伝わる」ためにどのような工夫が必要か意識する。※本手引きに掲載している工夫の例も参考にしてください。

一般的な開発プロセスと当事者参画型開発のプロセス

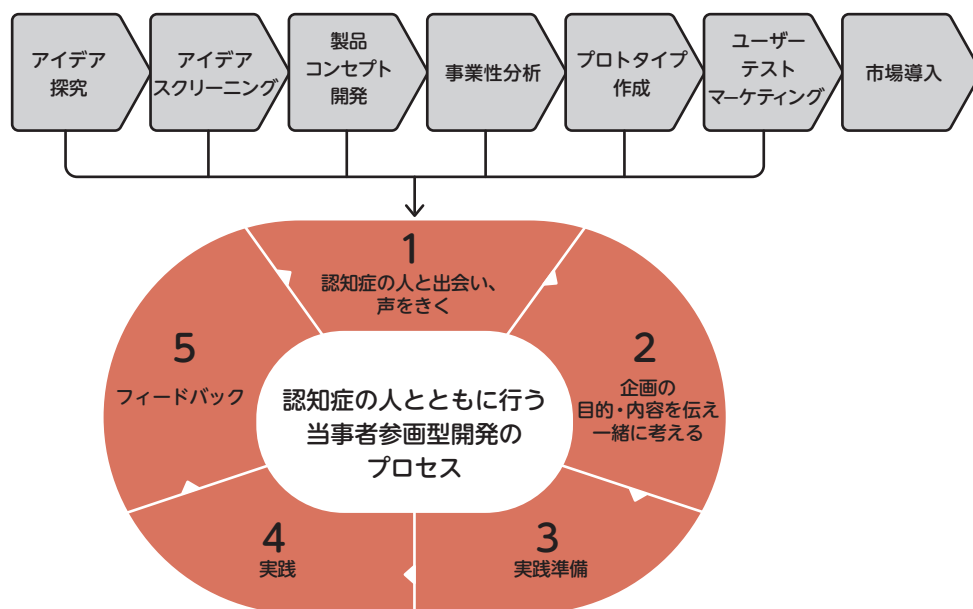
Episode 「開発のどのステップで一緒にできるといいんだろう？」



一般的な製品・サービスの開発プロセスはよく知っているけれど、どのステップに当事者参画型開発のプロセスを組み込み、どのような流れで進めていくのか悩んでいるツトムさん。必要なステップで、できるかぎり効果的に取り入れたいけれど…。

一般的な開発プロセスと当事者参画型開発のプロセスの関係性

一般的な開発プロセス



認知症の人の参画は、会社としての意思決定が必要な場面以外であれば、どのようなステップでも可能です。どこかにスポット的に参画してもらうことももちろん良いですが、継続して参画してもらい、関係性をつくっていくことで見てくることもあるはずです。

認知症の人に参画してもらう手法

Episode 「具体的にはどんな風に認知症の人と一緒にできるんだろう...?」



トモミさんから認知症の人と一緒にするときのキホンを聞き、一般的な開発プロセスへの取り入れ方も理解し、社内で当事者参画型のプロジェクトを提案するべく準備を進めるツトムさん。

しかし、具体的に形にしていけるプロセスでどんな風に認知症の人に参画してもらうのか、まだまだイメージが湧かないようです。

当事者参画の7つの手法

ここでは、7つの手法と、各手法において認知症の人と一緒にする際に留意しておきたいポイントをご紹介します。これらの手法は一から順に行うのではなく、開発のステップに適した方法、また、参画してもらう認知症の人が希望する方法を選び実践します。

手法1 One to one インタビュー（デプスインタビュー）

手法2 座談会（グループインタビュー）

手法3 行動観察・同行調査

手法4 試作品・製品ユーザーテスト

手法5 ワークショップ

手法6 日記・記録式調査

手法7 アンケート調査

いずれの手法も、会場までの移動の負担があることを考慮しましょう。また、家族や支援者のサポートが必要な場合があります。その場合には、実際に取り組む前に同行者の有無を確認し、その方とも連携して準備をします。

手法1 One to one インタビュー（デプスインタビュー）



GOOD POINT

- 大勢の人がいる前では話しづらいような、自身の症状や日常生活で困っていることなどをじっくり伺うことができる
- 周囲の会話や音によって他のものに注意を引かれたり、集中を遮られたりしないような、外的な刺激がない環境をつくりやすい
- 認知症の人のペースで考え、お話ししてもらった時間を取ることができる

注意 POINT

- 家族が同席している場合、認知症の人より先に家族が答えてしまう場合も多い。認知症の人と家族の席を少し離す・別の部屋にする、または、「まずご本人に聞きますね」と伝えておくなど工夫をする
- インタビュアーと認知症の人の関係性が大きく影響するため、前提となる関係づくりが必要
- ご自身で認識・言語化していない内容を伺うことは難しい

この手法を取り入れるオススメタイミング



この手法を用いる時に工夫できること

- 「コミュニケーションの工夫」（P.24）を確認
- 「オンライン開催の工夫」（P.33）を確認

手法2 座談会（グループインタビュー）



GOOD POINT

- 認知症の人が意識していない、言語化されていないことでも、他の参加者の話を聞くことが想起につながり、お話ししてもらえる可能性がある
- 認知症の人同士の交流が生まれる可能性がある。それによって、継続的なプロジェクトへの参画につながる場合もある

注意 POINT

- 参加者が複数いるため、自身に向けられている質問や声かけに集中しづらい可能性がある
- 人数によっては、一人ひとりのペースに合わせることができず、十分にお話を伺うことが難しいこともある
- 座談会のファシリテーターと座談会に参加する認知症の人の間に関係性がないと話しづらい場合もある。その場合、支援者など関係性のある方にファシリテーションをお願いすることも検討する

この手法を取り入れるオススメタイミング



この手法を用いる時に工夫できること

- 「コミュニケーションの工夫」（P.24）を確認

手法 3 行動観察・同行調査



GOOD POINT

- 認知症の人からは語られない（本人が意識していない）ことであっても、実際に製品・サービスの利用場面を見ることで、観察者が認知症の人の困りごとや工夫、本当は望んでいたもの・ことに気づくことができる
- 特定の場面だけでなく、認知症の人の暮らしている環境全体を見ることで、大きな視点での知見が得られたり、製品・サービスが使われる一連の様子を具体的に想像できる

注意 POINT

- 観察者の認知症に関する知識の有無・程度が気づきの量・深さに大きく影響する
- 認知症の人の暮らしの場などにお邪魔することになるため、認知症の人だけでなく、家族や支援者へ許可をお願いするなど、密な連携が必要となる
- 観察をした結果、一方的に行動の意図を解釈するようなことがないよう、事前に日常的な会話をしたり、認知症の人の普段の生活の流れの中で観察を行うなど丁寧なコミュニケーションをとることが必要

この手法を取り入れるオススメタイミング



この手法を用いる時に工夫できること

- 「コミュニケーションの工夫」（P.24）を確認

手法 4 試作品・製品ユーザーテスト



GOOD POINT

- 試作品や類似製品が認知症の人の手元にあることで、具体的な使用シーンをイメージできたり、実際に操作を体験することができたりして、スムーズに意見をもらうことができる可能性が高い
- 実際に品物を使用する場面を見ることで、認知症の人が意識していない困りごとや工夫に気づくことができる

注意 POINT

- 新しい製品・サービスを使用することに抵抗感がある可能性がある

この手法を取り入れるオススメタイミング



この手法を用いる時に工夫できること

- 「コミュニケーションの工夫」（P.24）を確認

手法 5 ワークショップ



GOOD POINT

- 他の参加者との関わりによって、認知症の人が意識していない・言語化されていないことをお話しいただける可能性がある
- 多様な立場の人に参加してもらいやすいため、日常的には関わりのない認知症の人と他の参加者が知り合うことができる。それにより、継続的なプロジェクト参画につながる可能性がある

注意 POINT

- 複数の参加者にとってできる限り負担が少ない会場づくり、進行方法をあらかじめ準備しておくことが必要となる
- 文字を書くことが難しい場合があるため、何かを記入するような個人ワークなどに対しては、支援者やファシリテーターの人員が必要な可能性がある
- 複数の人がいる場では、言語化しづらい、話を切り出すタイミングが掴めないなどの理由で発言しにくい人もいるため、個別で意見を聞く時間を取る。

この手法を取り入れるオススメタイミング



この手法を用いる時に工夫できること

- 「空間づくりの工夫」(P.28)を確認

手法 6 日記・記録式調査



GOOD POINT

- 認知症の人だけでの参画が難しい場合でも、家族や支援者と一緒に取り組みやすい
- 認知症の人の特徴的な暮らしのパターンや習慣を見つけられる可能性が高い
- すぐに言葉にすることが難しい場合もあるため、自分のペースで記入することで、認知症の人の思いや考えを引き出しやすい
- 参画にあたって移動の必要がなく、自宅など暮らしの場から参画可能である

注意 POINT

- 文字を書くことが難しい場合や、その日の出来事を記憶しておくことが難しい場合は、認知症の人だけで取り組むには負担が大きいこともある
- 認知症の人による記載が難しい場合、家族や支援者が全て記載する可能性があり、認知症の人の思いに反する内容にならないよう留意する必要がある
- 記入すること自体忘れてしまう場合がある。そのため、支援者や企業の方からのリマインドが必要となる可能性もある

この手法を取り入れるオススメタイミング



この手法を用いる時に工夫できること

- 「資料づくりの工夫」(P.31)を確認

手法7 アンケート調査



GOOD POINT

- 一人ひとり症状や困りごとが異なるが、特定の個人によらず、一般的なデータを得ることができる
- 参画にあたって移動の必要がなく、自宅など暮らしの場から参画可能である
- 認知症の人と直接会うことが難しい場合でも、一定のサンプルから数値・データを得ることができる

注意 POINT

- 文字の読み書きが難しい場合、認知症の人だけで取り組むには負担が大きいこともある
- 認知症の人による回答が難しい場合、家族や支援者が全て記載する可能性がある
- 直接個人とつながることは難しく、個人の特徴的な症状や困りごとを深く知ることはできない

この手法を取り入れるオススメタイミング



この手法を用いる時に工夫できること

- 「資料づくりの工夫」(P.31)を確認

当事者参画型開発のプロセス1

認知症の人と出会う

Episode 「まず認知症の人と出会うにはどうしたらいいんだろう？」



いくつかの手法を知り、早速、調査対象として何名かの認知症の人を探そうと考えたツトムさん。

トモミさんに相談してみると、「最初に調査の対象者として出会うのではなく、認知症の人たちの暮らしを知るところから始めませんか？」とアドバイスをもらいました。

地域にある認知症の人との集いの場

地域には、認知症の人同士や家族、支援者が集い、交流や情報交換をする場があります。企業の方がこうした場に出向き、実際に会うことは、何か社会の役に立ちたいと思っている認知症の人にも喜び、積極的にやりとりを楽しんでくださる可能性も大きいのです。ただ、その場に集まっている方たちにはそれぞれの目的や関わり方があることを忘れずに。

● 認知症カフェ

認知症の人やその家族が、地域の人や専門家と相互に情報を共有し、お互いを理解し合う場
(出典：厚生労働省 主な認知症施策について)

● 本人ミーティング

認知症の本人が集い、本人同士が主になって、自らの体験や希望、必要としていることを語り合い、自分たちのこれからのよりよい暮らし、暮らしやすい地域のあり方を一緒に話し合う場 (出典：厚生労働省 主な認知症施策について)

いずれも、開催場所や開催時期などについては、各地域の地域包括支援センターや役所の介護保険担当窓口へお問い合わせください。

また、認知症の人・家族が集まる「つどい」(公益社団法人認知症の人と家族の会)や、認知症の人同士・認知症の人と企業をつなげる取り組み(一般社団法人日本認知症本人ワーキンググループ)もあります。※詳細は、P.51 参照

認知症の人と出会ったきっかけ

開かれている場を訪れる以外にも、認知症の人をこちらから探し、直接話す機会をもらうというアプローチも可能です。ここでは、実際に企業の方が実践された出会い方をご紹介します。



社内の一斉メールやチャットグループでプロジェクトのことを書いてみたら、家族に認知症の人がいる社員が協力したいと手を挙げてくれた！



SNS等で認知症であることを公表し、発信・活動している方にダイレクトメッセージをしてお話する機会をもらった。



認知症の人が登壇する講演会に参加。講演会の後、主催の方に頼んで、ご挨拶をさせてもらい、後日改めて時間をいただくお願いができた。



最初から「企業の人」対「ユーザー・対象者」として出会うのではなく、まずは「人」対「人」として知り合い、一緒に過ごす時間をつくるのが大切です。本やネットで知識を学ぶことも必要ですが、人によって症状も暮らし方も全く違います。出会う人数が多ければ多いほど、新たな発見があるはずです。

ともに取り組む方と出会う

当たり前のことですが、認知症の人は、一人ひとりによって暮らしの様子も好きなことや関心のあることも違います。「認知症の人」と一括りにして、参画してもらう方のイメージを絞らず、認知症の人であればどんなでもいいとお願いするのではなかなかうまく進みません。

取り組みたいテーマやプロジェクトの内容に興味関心を寄せてもらえる方、これまでの経験を生かすことができる方を想定し、具体的にどのような方と一緒に取り組むかを考えてみます。

料理の段取りが難しくなっている方でも
使いやすいキッチングッズを考えたい…。



昔から料理が好きで、家族や親戚に振舞うことが大好きでした。認知症になってからは、少しずつ料理をすることが難しくなってきたけれど、できるだけ自分で料理をしたい！

記憶障害のある方に役立つ
メッセージアプリの開発に参加してほしい！



営業経験があるので、お話しすることが好きだし、
人とのやりとりは得意！

身体がうまく動かせない方でも、
着脱しやすい洋服を考えたい…。



夫婦や友達同士でお出かけすることが楽しみ。
認知症になってからは、着替えに時間がかかるようになってきたけれど、これからもいろんなところに行きたい！

Episode

「既にある企画書を使って説明すればいい…？」



「本人の会」に参加して、食事が大好きで、文章を読むことが少し苦手なアユムさんと親しくなったツトムさん。
アユムさんのような方の暮らしに役立つサービスを作りたいという気持ちが高まる一方、参画してもらうために企画の説明をする際には、既存の企画書では伝わりにくいかも…と感じていました。

企画の目的・内容を誰にでも伝わるように整理する

専門用語や難しい言い回しなど、企画書の中には社外の人には伝わりづらい部分がある場合があります。今一度企画書を見直し、要点が明確に伝わるか、容易に理解できるかなど、認知症の人に伝えるための整理をします。

「この企画の目的は、

誰が

認知症の人や障害のある人、高齢者など、
食事に関する困りごとがある方が

何を

今までどおりの食事を楽しめるようにする

…ための企画です。」

いつ

朝昼晩の食事の時

どこで

自宅で

認知症の人にどのような形で参画してほしいかを明確にする

企画が整理できたら、具体的に認知症の人に何をしてもらいたいのか、どんな話やアドバイスをお聞きしたいのかなど、参画の理由と方法を明確にします。

何のために（企画に参画してもらいたい理由）

認知症の人が、自宅での食事に関して感じている不便さや
困りごと、工夫していることをお聞きするため

どのように

- ・ 食事に関するインタビュー
（お聞きしたい内容:食事のメニューや自炊に関して困っていること /
好んで食べるもの・購入している食料品 など）
- ・ 自宅で一緒に料理を作り、食事をすること
- ・ 1週間の食事のメニューを記録してもらうこと

にご協力いただきたい。

企画全体のスケジュールを立てる

認知症の人とスケジュールを共有します。認知症の人にとっても、今後どのように進んでいくのか、企画のどの部分で協力するのかわかると安心です。

また、スケジュールを立てる際には、認知症の人に無理のない形で参画してもらえよう、話し合って調整することが大切です。



認知症の人とのやりとりが難しい場合、家族や支援者の方に向けて説明することもあります。その時は、認知症であることを認知症の人が認識しているかどうかを確認しておくことが望ましいです。認識されていない場合は、「認知症の人」「認知機能の低下」などの言葉を用いて良いか、家族や支援者に相談すると良いでしょう。

Episode

「開催にあたってどんなことに気をつけたらいいんだろう？」



アユムさんをはじめ、「本人の会」のみなさんのお話を聞く座談会を開催することにしたツトムさん。何か注意すべき点はあるかトモミさんに相談すると、「認知症の人に聞いてみて！」とのこと。アユムさんに尋ねると「夕方は疲れやすく午前中2時間程度が良いな」とのこと。お一人ずつ丁寧に聞いてみる必要がありそうです。

認知症の人に負担のない方法で連絡をする

認知症の人との連絡手段もできる限り負担がないようにしたいところ。細かいポイントでも、気をつけるとお互いにスムーズにやりとりができるはずです。



口頭で聞いただけでは、日にちや時間を間違えたり忘れたりしやすく、手帳に書き留めようとしても、書こうとした途端に忘れてしまうんです。日時・場所をメールでも送ってもらえると安心です。

認知症の人に参画の同意を得る

参画にあたって、プロジェクトの趣旨や実施方法などを依頼書にまとめ、当日、内容を説明した上で、同意書にサインをもらうようにします。認知症の人の意思決定に関しては、厚生労働省「認知症の人の日常生活・社会生活における意思決定支援ガイドライン」を参照ください。

● 依頼書のポイント

・謝金・交通費の有無・金額を明記

謝金・交通費の支払いは、主催・依頼者側で予め決めて伝える。同行者がいる場合は、その方の分の支払いも考えておく。

・結果の公開・公表に関する予定を明記

● 同意書のポイント

・代諾も可能とする

・同意撤回書も一緒にお渡しする

認知症の人と待ち合わせをする

※ **理由** は、P.47「認知症についての基礎知識」で紹介した認知機能のトラブルを示しています。

● 待ち合わせの約束前に確認するポイント

- 1 家族や支援者など、同行者の有無 一人での移動が難しい、知らない場所に不安を感じるなど、親しい関係の人がいることで安心し、リラックスして参加できることもある
- 2 疲れやすい環境や時間帯がある 事前に本手引きを確認し、P.25のやりとりを参考に、具体的な例を持ち合わせた上で相談できると良い

● 場所選びの時に気をつけたいポイント

- 3 認知症の人の馴染みの場所を選ぶ 認知症の人の最寄りの駅で待ち合わせたり、会場はよく利用する喫茶店や自宅、施設にする。
理由 初めての場所に戸惑ったり、移動が難しい場合があるため
- 4 段差・階段など身体的に負荷がかかる エレベーターの有無などを確認しておく
理由 空間認知や身体感覚に障害があり階段の上り下りに困難を抱える場合があるため
- 5 人が多くない場所・時間帯を選ぶ **理由** 音に敏感・人混みが苦手な場合があるため
- 6 使いやすいトイレの有無を確認する トイレは外出時不安要素の一つ。認知症の人に、和式・洋式どちらが使いやすいか尋ね、トイレまでの経路を確認する
理由 記憶、空間認知、身体感覚に障害がありトイレが探せなかったり、急に尿意を感じる場合があるため

● 待ち合わせの連絡～会うまでのポイント

- 7 待ち合わせ場所に近い駅の出口 **理由** 初めての場所だと方向がわからなくなったり、地図を読むことが難しい場合があるため
- 8 建物・会場入り口の写真を送る 建物の写真やグーグルマップのURLなど汎用的に参照できる地図をつけておく。
理由 自分の頭の中のイメージと結び付かない場合やサインに気付かない場合があるため
- 9 待ち合わせ時は、主催・依頼者側 **理由** 人の顔がわからない場合があるためからお声かけする



完璧に準備しよう！と意気込みすぎず、都度、認知症の人とコミュニケーションをとりながら進めていくことが一番大切です。

Episode

「必要なことをしっかり伺うことができるだろうか…」



座談会当日に向け、会場の手配など準備を進めるツトムさん。
不安を漏らすと、トモミさんからは「いつも通り、一緒に過ごす
時間を楽しめば大丈夫！」という言葉が。「何もかも予定通りに
進めなきゃと思わず、柔軟にね」とアドバイスされました。

当日までの調整や当日の流れを考え、準備する

● 待ち合わせの約束前に確認するポイント

- ① 1 週間前と前日など、何らか日時・ …… **理由** 一度連絡していても予定を忘れてしまう場合があるため
- ② 負担のないタイムスケジュール …… どの程度の時間参加するか、事前に希望を確認して、当日も来場時に確認する
理由 頭や身体が疲れやすい場合があるため

タイムスケジュールの工夫例

- ・冒頭のアナウンスで、途中参加・途中退室 OK と伝える
- ・長時間の場合、冒頭 1 時間のみ参加、その後は自由に退室・休憩を可能にする
- ・全員が休憩する時間を確保し、認知症の人から言い出さなくても退席・休憩しやすいようにする
- ・話題が変わる時は、混乱しないよう間に休憩をはさむ

- ③ 手順や目的など、何をしている …… タイムスケジュールや目的、今の話題をホワイトボードや A4 の紙に書き机の中央に置く。名前を忘れる場合があるため名札をつける。
理由 話した内容を忘れる、耳で聞くだけでは理解が難しい場合があるため
- ④ 互いの自己紹介をする …… いきなり製品紹介からせずに、自己紹介の時間を設ける。自分の名前・今日の気持ちと書いた紙を回して自己紹介するなど話しやすいよう工夫する。
理由 信頼関係を築くため
- ⑤ 実施目的や参加してもらう理由 …… **理由** 過去に話した内容を忘れる場合があるためを改めて伝える
- ⑥ 録音・録画・撮影をする場合、目的を説明し同意を得てから行う

● 当日のコミュニケーションのポイント

- ① 決めつけたり、安易な共感をしない



認知症の人の言葉に対して、「誰にでもありますよ!」など、簡単な共感に注意する。認知症ではない人にとっても「同じようなことがある」と感じることはあるかもしれないが、認知症の人にとっては「認知症の人とそうでない人では全く違う」という思いを持っていることもある。まずは、「そういうことがあるんですね」と受け止めること。

- ② ネガティブな言葉遣いを避ける

「～ができない」という言葉が並ぶとネガティブな印象になるため、「～が難しい」「～しづらくなる」と言い換えるなど工夫する。また、認知症を受け入れている人でも辛くなることがあるため「認知症」という言葉を過度に使いすぎないように留意する。

- ③ 同行者ではなく、認知症の人と話す

家族や支援者がいる場合、認知症の人を差し置いて同行者に真っ先に意見を求めたり、同行者にだけ名刺を渡したりすることのないように。認知症の人が同行者に遠慮して本音を言いづらくなることもある。



大前提として、人として気持ちの良いやりとりを！
気を配りたいポイントも多く、不安や緊張の気持ちもあるかもしれませんが、まずは目を見て認知症の人との会話・やりとりを楽しんでください。

- ④ 同じ質問・発言があっても都度やりとりをする

認知症の人は、同じ質問・発言を繰り返されることもある。以前のやりとりを忘れている場合もあるので、指摘したり軽んじたりしない。

理由 見聞きしたことをすぐに忘れる場合があるため

- ⑤ はっきりした言葉でゆっくり話す。一文を短くシンプルに話す、敬語を使いすぎずわかりやすい言葉を使う

- ⑥ 発言を急かさない、言いよどむことがあっても穏やかに待つ

理由 焦ってしまい、集中できなくなり話すことが分からなくなることがあるため

- ⑦ 複数人が同時に話さない

理由 誰の発言を聞いて良いのか判断が難しいことがあるため



認知症の人とのコミュニケーションの工夫事例

主催・依頼者側が知りたいことを教えてもらうということは、普段認知症の人が無意識に行っていることや言葉にしづらいことを聞く可能性もあります。ここでは、そんな時に取り入れたい工夫を事例とともに紹介します。



話の流れを理解・整理することが苦手。話の途中で、「あれ」「これ」などが何を指しているのかわからなくなる。

「〇〇ということですが、」「〇〇について、もう少し教えてください」など **話の内容や聞きたいことを復唱したり言い換えたりする工夫をした。**



いろんな話をした後に、「具体的には？」と聞かれたが、何の具体例を話せばいいのか理解できなかった。

「他の方は△△に困っていると教えてくださったのですが、〇〇さんはいかがですか？」と **匿名で他の認知症の人の話を紹介しつつ質問**。すると「あるある」「それはない」「私はこうだ」とお話ししてもらうことができた。



「移動の時、どのようなことに困りますか？」って聞かれたけど、イマイチ自分が何に困っているのかわからなかった。

認知症の人と電車に乗り **共に行動しながら話を伺った**。すると、駅で標識を見て迷われている様子があったので、「どういうところがわかりにくいですか？」と尋ねると、「あの矢印の指している方向がわからない」と具体的に困っていることを教えてもらうことができた。



プロジェクトテーマに固執せずに話を聞く

プロジェクトテーマにぴったりのお話を聞くことが難しいという声をよく耳にします。しかし、認知症の人のお話の中にはプロジェクトのヒントとなるような内容がたくさんあるはずです。一見、テーマとは関係ないと思っても、背景にある原因を考え、そのほかのシーンでも困ることがないか考えてみましょう。

食事や睡眠の
タイミングがわからない



歯磨きをする時も
適切なタイミングがわからず、
歯磨きができないということは
ないだろうか？

理由＞ 24 時間の時間感覚が失われる場合があるため

会話中、周囲の音が
気になり話が聞けない



買い物中も、
スーパーの BGM に気を取られ、
お会計に集中できない
ということはないだろうか？

理由＞ 聞くべき音、見るべきものに集中できない場合があるため

家電（洗濯機・テレビ・炊飯器・レンジ）
の操作が難しい



移動中も、駅の券売機操作に
迷って、切符が買えない・
チャージできないということ
はないだろうか？

理由＞ 慣れ親しんだ手続きや習慣を思い出せない、抽象的言語や記号が表す意味がわからない場合があるため

コミュニケーションおたすけツール

● 事例カード

他の認知症の人、似た症状をもつ方の事例をお伝えするカード。自分も同じような困りごとがあると認識したり、話しやすくなったりする場合がある。座談会やワークショップ形式ではない、一対一のインタビューの際にこのようなツールがあると役立つ。



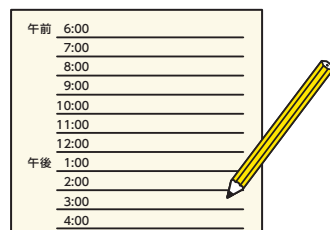
● 生活のキーワードカード

生活の中で使う具体的なものをイメージすることのできるキーワードカード。例えば、食事で困っていることを聞かれても、「食事はできているから特に困ることはない」と言われる可能性がある。しかし、「お茶碗」「箸」「ヨーグルト」など具体的なキーワードを用いて尋ねてみると、「お茶碗を持つことが難しい」「箸の扱いが難しい」「ヨーグルトの蓋を開けることが難しい」というように、具体的な困りごとをお聞きできることもある。



● タイムスケジュールシート

認知症の人の1日や1週間の生活の様子を記録してもらうシート。その方の毎日のスケジュールや習慣を知り、具体的にイメージしやすくなる。ただし、記録の負担もあることを忘れずに！



Point

「日常の様子を伝える」ということは、日頃無意識に行っていることに気づく行為であり、簡単なことではありません。また、「困っていることを話す」ということは、自分のできないこと、苦手なことを人に伝えることで、とても勇気のいることです。

当事者参画型開発のプロセス4-2

空間づくりの工夫

Episode

「会場づくりで工夫できることってあるのかな？」



座談会当日まであと少し。会場のセッティングに追われているツトムさん。アユムさんは騒がしい空間が得意ではないことを思い出し、どうしたら皆さんがリラックスして参加できるのか考えているようです。

負担の少ない会場づくり

会場づくりで気をつけるべきポイントを、ワークショップ会場をもとに紹介します。他の手法の場合でも、ポイントは同じです。

● 会場づくりのポイント

- 1 案内スタッフを配置する
理由＞サインがわからない、見つけられない、同じような扉があるとどこに入ったら良いかわからない場合があるため
注意＞同行が必要かどうかは認知症の人に確認する
- 2 会場やトイレの場所などはわかりやすい案内表示を置く
理由＞ビルの一室の場合、元いた場所に戻れない場合がある。また、体性感覚が鈍感になり急にトイレに行きたくなる場合があるため



わかりやすい案内表示の例



文字とイラストを組み合わせる
抽象的な言葉やイラストのいずれかだけでは理解・判断が難しい場合があるため



目に入りやすい案内板を立てる
案内表示は壁面に沿って貼ってあるものだと見落とす場合があるため

3 別部屋・仕切りなどで休憩できる場所をつくる

理由＞ 疲れやすい場合があるため

4 会場の室温は適温を保ち、ブラケット等で調整可能にする

理由＞ 体温や汗の調節が難しい場合があるため

5 複数のグループを作る場合は、テーブルの間隔をあける

6 マイクやBGMの音量を適切にし、スピーカー付近の席は避ける

7 音が反響しないようにする

理由＞ 大きな音に敏感になる、騒がしさを集中が切れる場合があるため

8 状況に適した明るさを確保する

9 明るさを調節する際は急激な変化を避ける・声を掛ける

10 スポットライトや直射日光など、眩しい光を抑える

理由＞ 光が目には刺さるような痛みとして感じる場合があるため

11 混乱を招くような影や模様がないようにする

理由＞ 影やマットが穴に見えたり、床の模様が歪んで見えて歩行が難しくなる場合があるため

12 刺激になるような匂いがないようにする

理由＞ 嗅覚が敏感になる場合があるため

13 座席の位置は移動できるようにする

理由＞ 明るさや音の調節など、認知症の人が会場に到着しないとわからないこともあるため

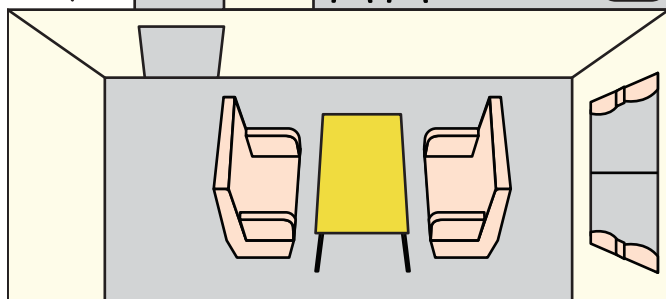
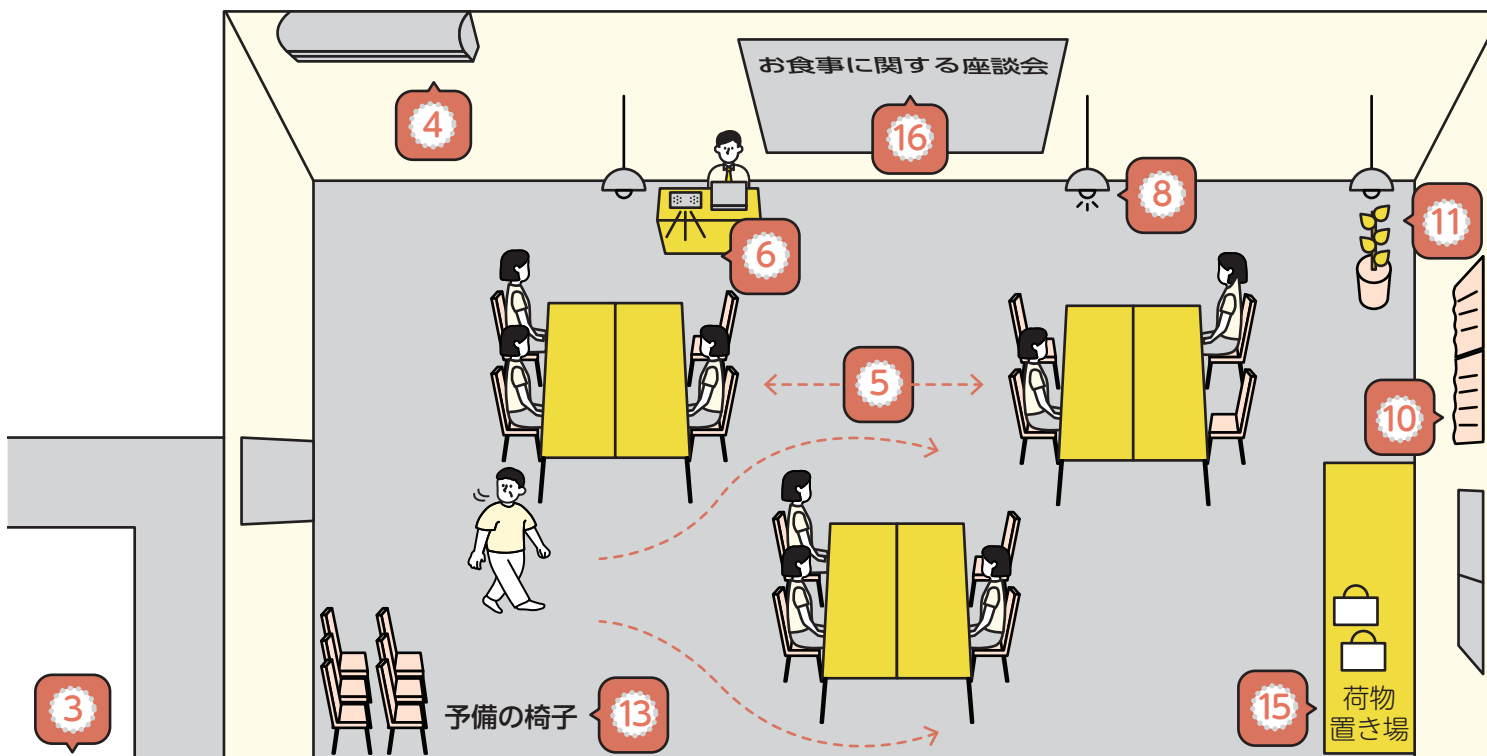
14 家族や支援者が同席する場合の座席位置は相談して決める

15 会場内は整理整頓し、移動しやすいスペースをつくる

理由＞ 狭い場所では体が動かしにくい場合があるため

16 モニターやホワイトボードにテーマ等を提示する

理由＞ 見聞きしたことをすぐに忘れる場合があるため



認知症の人に苦手なことや不安なことがあるか事前に尋ね、できる限りの配慮をすることは大切です。ただし、実際の会場に来てみないとわからないことや当日の体調によって変化することもあります。そのため、臨機応変に調整できる場づくりやサポート体制を心掛けましょう。

Episode

「わかりやすい資料って、字を大きくすればいいのか…？」



座談会当日が近づき、当日配布する資料づくりをしているツトムさん。そういえば、アユムさんが「文字がビッシリ書いてあるものは読みづらい」と言っていたような…。トモミさんが本人の会で配っていた資料を見て、どんなところに気をつけているのか確認し、試行錯誤しています。

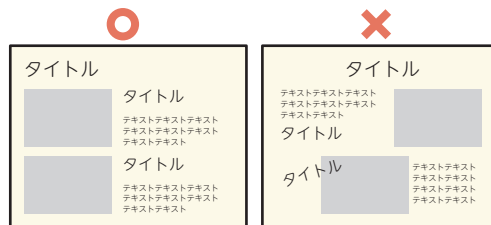
誰にでもわかりやすい資料をつくる

ワークショップやインタビュー時、いずれも視覚的に優しく、内容が読み取りやすい資料を作成しましょう。

● 資料づくりのポイント

- 1 タイトル・文章・イラストなどのレイアウトをみだりに変更せず、統一する

理由 文字や文章の位置が変わると、どこを読んでいたのかわからなくなり読みづらい場合があるため



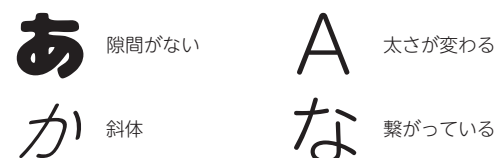
- 2 必要以上に複数のフォントや文字サイズを組み合わせず、統一する

理由 文字のサイズやフォントが何度も変わると、どこを読んでいたのかわからなくなる場合があるため



- 3 文字サイズは読みやすく、大きなサイズにする（12～14ポイントが適切）

- 4 文字はシンプルなUDFont（ユニバーサルデザインフォント等）を使用する



- 5 色のコントラストをつけ、識別しやすい色を使わない

- 6 蛍光色などの目がチカチカするような刺激となる色の使用は避ける

- 7 使う表記・言葉を統一する
時間の表記に24時間表記と12時間表記が混在しているとわかりづらい
理由 抽象的言語や記号があらわす意味がわからない場合があるため

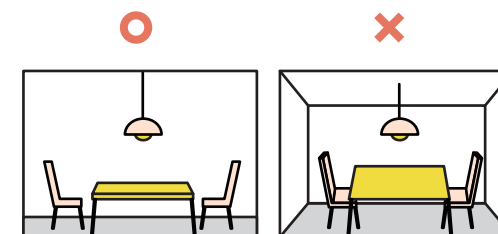


午後2時 14:00 PM2:00
3階 3F
2/13 2月13日

- 8 3Dのイラストを極力使わない
理由 空間の把握が難しく、立体や3Dのイラストを理解しづらい場合があるため

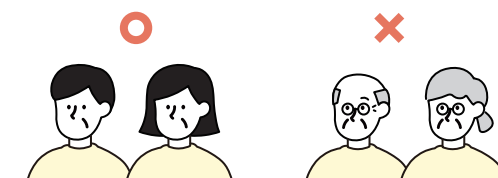
- 9 文字だけでなく、イラストを組み合わせる

理由 文字から具体的なものや様子をイメージすることが難しい場合があるため



- 10 認知症の人の説明をする時、極端に高齢者と感じるイラストを使わない

理由 若年性の方もいらっしゃるため、認知症＝高齢者という決めつけをしない



- 11 資料で指し示す場所がわかりやすいように、ページ番号を降ったり、両面印刷を避けたりする

理由 ついさっき見聞きしたことを覚えることが難しく、どこを読んでいたのかわからなくなる場合があるため

- 12 メモをとる余白を設ける

- 13 1文をシンプルにし、敬語を使いたくない

理由 長い文章や聞き慣れない表現は、文章の理解が難しい場合があるため

Episode

「認知症の人とオンラインでやりとりできる…？」



はじめての座談会が無事終わり、一安心。ところが、プロジェクトを進めるにあたりどうしてもアユムさんにもう一度お話を聞くことに。うまく都合が合わず、オンラインでお話しすることになりましたが、認知症の人とのオンラインでのやりとりは初めてのツトムさん。どんなことに気をつければ良いか、悩んでいます。

オンラインの事前準備

現地に伺えない時や認知症の人の移動の負担が大きい場合は、適宜オンラインでのコミュニケーションを活用しましょう。ただし、可能であれば事前に1度でも対面で顔合わせできることが望ましいです。オンラインでのインタビューやワークショップ、打ち合わせの開催は、音声や映像、接続方法、操作など様々な面で、認知症の人に負担となる場合があります。そのため、できるだけ事前に認知症の人と相談し、最適な方法や環境を準備しましょう。

● オンライン開催の準備において気をつけたいポイント

- 1 適切な所要時間を相談して決め、……理由＞画面をじっとみる、音が聞き取りづらいなど、対面よりも集中力を使い、疲れやすい場合があるため
- 2 オンラインとオフラインのハイブリット形式の開催も検討する
理由＞認知症の人のいる場所に、支援者や担当者が出向き、その他の参加者はオンラインで参加するなどの方法も検討
理由＞直接顔を合わせてやりとりの方が負担が少なく、オンラインのツールを使用することが難しい場合があるため

ハイブリット形式で開催するときに、より負担なく参加してもらう工夫例

- ・ 認知症の人側に、大きな画面で共有できるモニターを用意する
理由＞小さな画面に集中することが辛い場合があるため
- ・ 認知症の人側に、外付けのスピーカー・マイクを設置し、音量も認知症の人と相談して決める
理由＞音声が聞き取りづらいことで集中できないことや、音量が大きくなりすぎて疲れる場合があるため

オンラインでの認知症の人とのコミュニケーションを考える

オンラインならではの工夫をご紹介します。P.24 のコミュニケーションの工夫と合わせて参考にしてください。

● オンラインでのコミュニケーションにおけるポイント

- 1 騒がしくない環境で参加する
理由＞周囲の環境音など雑音が耳に入り、集中できない場合があるため
- 2 画面でも伝わりやすい表情やリアクションをとる
理由＞リアクションがないと不安な気持ちになる場合があるため
- 4 参加者の顔を見せて自己紹介の時間を設ける
理由＞顔が覚えられない、毎回違う顔に見える、名前が覚えられない等の場合があるため
工夫＞表示名を「名前・所属先」に変更する。漢字が読めない場合もあるため、名前はひらがながわかりやすい

- 3 画面上に表示される人数は、画面のオン・オフで調整する
理由＞複数人の顔が見えていると疲れたり、気が散ったりする場合があるため



- 5 認知症の人の症状に合わせて、字幕機能や文字起こしを活用する
理由＞周囲の環境音など雑音が耳に入り、集中できない場合があるため



遠方の方ともやりとりができる便利さがある反面、やはり対面で顔を合わせることよりもハードルは高いかもしれません。それでもチャレンジしたい！という気持ちを持ってくださる方とは、ぜひ一緒に取り組んでみてください。

Episode

「認知症の人とオンラインでやりとりできる…？」



アユムさんを含め、何名かの認知症の人と一緒に過ごす時間をつくりながら、サービスのアイデアを練ってきたツトムさん。「いろいろな声を聞くことができて、なかなかいいアイデアになってきた。でも、全部をその通り反映させるのはなかなか厳しそう…社内の調整もあるから、時間もかかる…」と悩んでいます。

社内・チーム内で振り返りの時間をとる

実施した内容が目的に沿ったものだったかを振り返り、企画の目的や内容に立ち返る時間をきちんととりましょう。P.21にある企画の当初の目的・内容とともに、実際に認知症の人とご一緒に得られた意見や声、協力してくださった支援者の方々や認知症の人からもらったフィードバック、さらに、メンバーがそれぞれ感じたことも丁寧に振り返り、それらをどう企画に活かしていくかという視点で、改めて考えます。

その後の認知症の人との進捗共有

ただ、「意見を聞いたから OK」「参加してもらったから OK」というように認知症の人の意見や思いをそのままにせず、目的に沿って反映させることが大切です。

認知症の人の声の全てを反映することが難しいことや、形になるまでに時間がかかることは当たり前です。完成形の最終成果だけが報告ではありませんので、進捗を共有しましょう。



インタビューを受けた後に、その時の内容をどう反映したいと考えているのか、途中経過の報告をもらった。一緒に取り組んでいることを改めて感じる事ができて嬉しかった！



時間が経つと自分が関わったことを忘れることがある。後日またやりとりをする際には、目的やこれまでの流れなどをもう一度丁寧に説明をもらった。

情報の公開

開発の経緯や、認知症の人に協力してもらった内容・情報を公開することは、今後同様の取り組みをしたい企業の参考にもなるでしょう。ただ、認知症の人や家族が知らないうちに情報が公開されたり、希望しない内容が公開されたりすることがないように、事前にその内容を相談しながら進めます。

● 情報公開に関する相談をする際のポイント

- 1 情報の公表について誰に（認知症 …… 誰に確認するべきなのかを事前に伺う。当事者の人・家族・支援者）確認するの （本人）と家族で意向が異なる場合がある
がよいかなと悩む
- 2 確認してもらった際に資料をどのよ …… 紙のみ / データのみ / 両方などパターンを用意し、
うな形でお渡しするか、負担のな 認知症の人に確認する
い形式をとる
- 3 公表する内容を丁寧に伝える …… 名前は公表 OK だが写真は公表 NG といった場合
や、逆の場合などもあるため、ひとつずつ確認する
- 4 公開情報の形式を複数検討する …… 名前は本名ではなく、イニシャルや仮名にするなど、
パターンを用意し、認知症の人の希望に沿うよう
にする
- 5 公表する媒体と方法を伝える …… SNS や広告、広報など可能性のあるものを挙げて
お伝えする



特に認知症の人は、状況や暮らしが短期間で変化していくこともあるため、連絡を取り、つながり続けることも大切です。また、まだまだ当事者参画型開発の実践が少ない中で、試行錯誤しながら取り組んできた内容を公開することは、プロジェクトの範囲を超え、認知症の人と共創する社会をつくっていく第一歩にもなります。

企業の取り組み事例

事例 01 手首に巻きつける“身につけるメモ帳” wemo®バンドタイプ アクセシブルモデル (株式会社コスモテック)



株式会社コスモテックは、大切なことを忘れないために手や腕にメモを書いてしまう、せっかく取ったメモを紛失してしまうなど「記憶に対する物理的 / 精神的なストレス」を軽減することを目的に、「いつでも / どこでも、書ける / 思い出せる」がコンセプトの、腕に巻いて使用できるウェアラブルメモ wemo® を開発。シリコン素材に独自のコーティングを施し、油性ボールペンで書いても消しゴムや指で消すことができ何度でも使用できる。認知症の人との声を反映した新モデル「wemo®バンドタイプ アクセシブルモデル」を 2025 年 3 月より販売中。

共創のプロセス

開発のきっかけ wemo®の利用者であった若年性認知症の当事者から「時計と一緒にメモを手首につけるために改善してほしい」とのメールが企業に届いたことをきっかけとして改良版の開発に着手。

開発に参画した当事者 神奈川県大和市の当事者団体に所属し、郵便局で働き続ける方や、町田市で Dフレンズ町田が開催している若年性認知症当事者研究会のメンバー、その他自治体の認知症カフェ等に参加する認知症の人が参画している。

開発の進め方 誰もが使いやすい形状やデザインの実現に向け、既存製品や改良版のプロトタイプを日常生活の中で使用してもらったうえで、インタビューや意見交換を繰り返し実施。

参画した認知症の人からの製品・サービスに対するフィードバック



実証に参画した
当事者

腕に巻き付けて、書いて、消すという製品の特性自体はわかりやすく非常に便利。ただし使い方がわからない、想起できないことがある。



実証に参画した
当事者

メモが視界に入りやすく思い出せる。一方で、デザインが複雑だとノイズになるので、できるだけシンプルにしてほしい。製品ロゴがあると、何のためのものか考えすぎてしまう。



実証に参画した
当事者

wemoを左手、時計を右手につけて使用しているが、少し不便に感じる。時計と一緒にメモを利き手の手首につけやすくするために、素材や幅を工夫してほしい。

企業担当者の気づき



代表取締役社長
高見澤 友伸

機能とは関係のない不要な意匠（デザイン）の存在により、利用者が混乱し、悩む可能性があることなど、認知症の人との対話を繰り返したからこそその気づきを得ることができました。

● フィードバックをもとに改良した主な点

- ・ 1 日の流れを「朝・昼・夕方・夜」と時間で区切りやすい野線をつけ、1 日の予定や大事なことを振り返ることができるようなデザインを採用。
- ・ やり忘れを防ぐことができるチェックボックスを配置。
- ・ 「ロゴがあると、何のためのものか考えすぎてしまう」という声を受け、ロゴは目立たないようライトグレー色にして見やすさを優先。
- ・ wemo® シリーズに初めて触れていただく方でも迷わず使えるよう、分かりやすい「使い方ガイド」を制作。

事例 使いすぎ防止やワンタッチカード停止などの機能を搭載

02 KAERU (KAERU 株式会社)



KAERU 株式会社は、「誰もが買いものを楽しみ続けられる世の中にする」ことを会社のビジョンとして掲げ、2022年5月より、キャッシュレスサービス「KAERU (かえる)」の提供を開始。KAERU は、もの忘れが増えてきた方や認知機能の低下に不安がある方、認知症と診断された方のお買いものをサポートするアプリで、スマートフォンと事前チャージ式のカードを組み合わせ、誰もが簡単にキャッシュレスを利用できる。開発にあたっては、実際に認知症と診断された方にも使用してもらい、認知症の人が実際に抱えている課題に寄り添ったサービスの開発を行っている。

共創のプロセス

開発のきっかけ 認知症の人と直接話す機会があり、支払い時の苦勞や、買ったことを忘れて同じものを何度も買いすぎることで、家族からの過度な心配により自分の意思でお金を使うことが制限されてしまっていて尊厳が傷ついてしまう場合があることを知った。視力が下がったらメガネを、足腰が弱ったら杖を使うのと同様に、認知力が弱ったら KAERU を使ってほしいと思い、開発を進めた。

開発に参画した当事者 インターネットや知り合いづてで少しずつご紹介を受けてご協力を募った他、オレンジイノベーション・プロジェクトのパートナー団体からも紹介を受けた。一人でも買いものを楽しみ続けたいと思っているものの、金銭管理に不安を抱えている当事者の方が参画した。

開発の進め方 日常生活の中で製品を使用してもらい、インタビューや意見交換を繰り返し実施。アプリ機能実装の際は、ラフスケッチの状態で見えをもらったり、ノーコードで簡易に作ったものを触ってもらったりと、段階的に認知症の人から意見を得た。

参画した認知症の人からの製品・サービスに対するフィードバック



実証に参画した当事者

買い物時にメモを書いているが、メモ自体を家に置き忘れてきたメモを見ることを忘れてしまったりすることがある。メモを書いたことを忘れても大丈夫な機能があると安心して買い物ができる。



実証に参画した当事者

現金でのやり取りだと金額通りにお金を出すこと、小銭の判別をすることが苦手になり、レジでプレッシャーを感じる。キャッシュレス決済を使えることで、自信を持って買いものにかけられる。

企業担当者の気づき



取締役 COO
福田 勝彦

開発活動においてユーザーの声を聞くことは当たり前のことです。認知症の人に開発活動に参画してもらうことで、自分たちでは気づかない視点のフィードバックをもらえるので学びになります。

● フィードバックをもとに改良した主な点

- ・ 買い物メモを書いたことを忘れてしまうという声をもとに、位置情報と連動したメモ機能をつくり、お店の近くについたら通知が届く機能を実装。
- ・ 決済端末にカードをスライドする動作は思っている以上に繊細な操作であり、決済失敗が発生していることがわかったため、ICチップを搭載し、スライドしなくても決済がしやすい方式に変更。

事例 誰でも開け閉めがしやすいファスナー
03 click-TRAK® Magnetic / 挿入補助パーツ /
ユニバーサルデザイン引手 (YKK 株式会社)

既存品



オレンジノベーション
プロジェクト開発品



YKK 株式会社は、ファスナーなど小さな部品でも、誰もが暮らしやすい社会づくりの一助になることを目指し、3つの既存商品をリニューアル。1つ目は click-TRAK® Magneticというファスナーで、左右の開具に内蔵されているマグネットの引き合う力で簡単に組み合わせるアイテム。2つ目は、後付け可能な樹脂パーツを取り付けることで挿入を補助し操作性を向上させる挿入補助パーツ。そして、3つ目はつまみやすさを高めたユニバーサルデザインの引手です。

共創のプロセス

開発のきっかけ 2023年度のオレンジノベーション・プロジェクトの取り組みの中で、「ファスナーの開け閉めがしづらい」という認知症の人からの声をきっかけに、自社の商品・技術が、少しでも認知症の方々の日々の暮らしの中に役立つことを、当事者の方々と一緒に考えたいと思い開発を始めた。

開発に参画した当事者 オレンジノベーション・プロジェクトのパートナー団体から紹介を受け、日頃着ている衣服や普段使っているポーチ等のファスナーの開け閉めに難しさを感じている当事者の方60名以上が参画した。

開発の進め方 東京や鳥取、大阪、福井をフィールドとし、デイサービスやグループホーム、本人ミーティング等を訪れ、実際に認知症の人やパートナーに衣服や鞆につけた3種類のファスナーの試作品を体験してもらう場を設け、そこでの意見をもとに既存商品の改良を進めた。

参画した認知症の人からの製品・サービスに対するフィードバック



実証に参画した
当事者

自分で衣料やポーチの開け閉めをしたいが、手が思うように動かず上手に扱えない。自身でファスナー付きの製品を扱えるようになれば嬉しい。



実証に参画した
当事者

マグネット付き製品の操作方法がこれまで慣れている方法と違い最初は戸惑ったが、慣れるとこちらの方が使いやすい。



実証に参画した
当事者

挿入口が大きい試作品は手元を見なくても感覚で入れることができた。パーツの上下は異なる色の方が分かりやすい。

企業担当者の気づき



企業担当者：佐藤啓
開発担当者：数田久生/
政二 恵利子/安中 成樹

ファスナーの開け閉めがしづらいと感じる背景には、少しの難しさがいくつも重なることにあり、ということに当事者の皆様との協働を通じて改めて気づきました。

● フィードバックをもとに改良した主な点

- ・click-TRAK® Magneticにおいて、組み合わせ部分の色を変更することで、使用時の視認性を向上させた。
- ・挿入補助パーツにおいて、挿入口を広げることで、よりスムーズな操作を可能とした。
- ・ユニバーサルデザイン引手において、指にひっかけやすい形状から、よりつまみやすい形状へ変更した。

事例 高齢者に「使いやすさと安心」を提供するガスコンロ

04 SAFULL + (リンナイ株式会社)



リンナイ株式会社は、西部ガス株式会社、福岡市、株式会社メディヴァと共同で、誰もが安心して使い続けられることを目指したガスコンロ「SAFULL +」を開発し、2024年2月1日より発売中。福岡市在住の認知症の人や支援者等が開発初期段階から参画し、誰もが使いやすいカラーリング、安心して鍋が置ける大型ごとか、聞き取りやすい音声案内等を実装した。

共創のプロセス

開発のきっかけ 福岡市が主催する「福岡オレンジパートナーズ」のイベント等を通じて、消費者である認知症の人から「認知症になっても使い慣れたコンロで料理を続けたい」という思いを直接聞いたことをきっかけとして開発に着手。

開発に参画した当事者 福岡市内のデイサービス等を利用しており、いつまでも使い慣れたガスコンロでの料理を続けたいと思っている認知症の人や支援者等を福岡市経由で紹介してもらった。

開発の進め方 福岡市在住の認知症の人や支援者が初期段階から参画し、イラストやデモ機を用いたヒアリングやモニタリング、関係者間の振り返りを複数回実施。これらの機会を通じて、当事者との会話や行動観察から当事者視点のニーズと課題を丁寧に確認しながら、機能やデザインの作り込みを実施。

参画した認知症の人からの製品・サービスに対するフィードバック



実証に参画した当事者

今後もガスの炎で大好きな料理を作りたい。使い慣れたガスコンロから電気式コンロ（IH）に変更したが、使い方がわからず、料理そのものをあきらめてしまっていた。



実証に参画した当事者

既存のガスコンロを見たとき、点火スイッチよりも火力ツマミのほうが目飛び込んでくる。また、曖昧な配色だと室内の光や影でわかりにくくなり、製品の立体感がのっぺりして見えてしまう。白と黒のコントラストがないと分かりにくい。



実証に参画した当事者

ブザー音だけだと、何のために音が鳴っているのか分かりづらい。「右、コンロ、15分間、使用しています」等の具体的なメッセージを発して欲しい。しゃべり方、声の大きさ、話すスピード、表現、間合いも理解のためには重要になる。

企業担当者の気づき



開発担当者

試作品を体験いただく際に、認知症の当事者が、悩みこんだり、しゃがみ込んだりすることもあります。そういった行動の要因を読み解くことも必要になってきます。実際の環境で試してもらい、会話や観察を通して本当の課題が何かを理解することができました。

● フィードバックをもとに改良した主な点

- ・ 安心安全機能を充実させ、消し忘れも複数の方法で報知することで防止、暗い環境でもくっきり見える白と黒の2トーン基調とし、操作スイッチは操作間違いや誤認をさせない配色を採用。
- ・ 距離感がつかみにくく鍋をコンロ中心に置きにくいという事例もあったため、鍋を置きやすい四角の大型ごとかを実装。
- ・ 操作案内や状況報知のため音声やブザーを搭載。聞き取りやすいスピードと言葉と言葉に間をあけるなど聞き取りやすい工夫を実施。音声は日常的に使わない言葉は唐突に言われると聞き取りができない為、口語表現に特化した内容としている。

事例 当事者が使いやすい衣料品、日用品

05 認知症当事者の方にも優しい衣料品（豊島株式会社）



豊島株式会社は、2024年度からオレンジイノベーション・プロジェクトに参画し、「認知症当事者の方にも優しい衣料品」の開発・展開に取り組んでいる。開発にあたっては、東京医科大学病院が運営する認知症カフェ「認茶屋」への定期的な訪問や自治体の行う本人ミーティング等への参加を通して、認知症の人や専門職等に実際に試作品を体験してもらい、改善点をともに検討してきた。当事者にとってより使いやすく、着用することで気持ちが明るく豊かになる衣料品の展開を目指している。

共創のプロセス

開発のきっかけ 衣料品を扱う商社として、特に50～60歳の女性向け商品の開発を進めてきた。高齢者の4人に1人が認知症の人又はその予備群である社会においては、認知症の人も含めた顧客像を想定することが重要であり、また、ユーザーニーズの確認は必須であることから、実際に認知症の人とともに取り組み始めた。

開発に参画した当事者 東京医科大学病院が運営する認知症カフェ「認茶屋」で実践を積み重ねた。認茶屋には、認知症の診断を受けた後も自分たちで外出し、ファッションに興味がある方が多く集っていた。

開発の進め方 当初、衣服・雑貨等の多様な既存商品を前に、当事者との意見交換を行った。認知症の人にとっても、普段から身に着ける頻度の高いシャツ・ズボンに焦点を当て、開発を進めることに。この段階からデザイナーも参画し、当事者の意見を反映したサンプルを作成→フィードバック→改良を短期間に複数回繰り返して開発を進めた。

参画した認知症の人からの製品・サービスに対するフィードバック



実証に参画した当事者

シャツについて、ボタンの口が斜めになっているのは、とても使いやすい。また、腕を上げたときに引っかからず、脇の部分が広がっているもの良い。袖口が半分ゴムになっているのはおしゃれだけど、大概まくっているから全部ゴムでも良いかもしれない。キッチンで作業するときに、ゴム手袋をはめられないのは困る。普段、おしゃれ着と部屋着を分けていないから、きれいめの服でもキッチンの作業をする。できれば、肘までめくれるものと良い。



実証に参画した当事者

ズボンは、脱いだ時に裏地が分離してしまっていて、正しい形がどうだったかわからなくなってしまう。ふくらはぎの部分にファスナーを付けるのであれば、外側ではなく、内側にあった方が恥ずかしくない。紙パンツの人にとっては後ろ側がゆったりしていると良い。

企業担当者の気づき



開発担当者
尾堂 望夢

認知症の人との対話を通じて、必要なプロダクトは外出しなくなる（外出することの妨げにならない）衣料品であると気づきました。

● 今後の改良方針

- ・外出することが目的であり、着脱しやすい衣料品はそれを実現する手段の一つであることを意識しながら開発を進める。
- ・認知症の人の声を反映したズボン・シャツ等が出来上がってきたところ。今後、マーケットに商品売っていくフェーズに入る。当社は「商社」という立場だからこそ、小売・通販企業を巻き込んで拡販していきたいと考えている。

● 認知症とは

アルツハイマー病その他の神経変性疾患、脳血管疾患その他の疾患により日常生活に支障が生じる程度にまで認知機能が低下した状態として政令で定める状態。（出典：共生社会の実現を推進するための認知症基本法）

● 認知機能とは

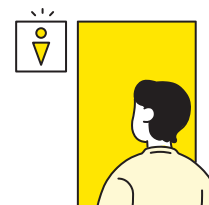
認知とは、五感（視る・聴く・触る・嗅ぐ・味わう）を通じて外部から入ってきた情報から、



などといった、人の知的機能を総称した概念。

（参照：公益財団法人長寿科学振興財団 健康長寿ネット）

例えば、わたしたちが外出先でトイレに入るまでのプロセスで、認知機能の働きを見てみましょう。



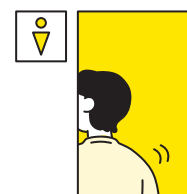
STEP1 視覚での知覚

歩いて、目で探して、トイレのマークが目に入る



STEP2 記憶の想起と解釈

視覚でとらえたマークの情報と、自分の記憶を照らし合わせ、そのマークが何を意味するのか解釈する



STEP3 判断と実行

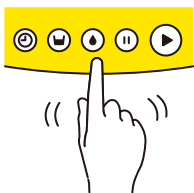
得た情報から、自分がどう行動するかを判断・実行する

ある行動に至るまでに、わたしたちはこうしたステップを一瞬で行っています。しかし、認知機能が働きにくくなると、この一連の過程がうまくいかなくなるのです。



認知症の人の症状や困りごとの背景には、こうした何かしらの認知機能のトラブルがあるのです。また、例えば複雑なデザインや仕組み、人々の偏見や無理解も、認知症の人を惑わせたり混乱させたりする要因になっています。

● 認知症の人から伺った困りごとの例



家電を使う場面で…「新しい家電の操作が難しい」

洗濯機を買い替えた時、これまでのものとボタンの配置や言葉が異なり、どのボタンをどの順番で押せばいいかわからない。この背景には、抽象言語の概念の理解が難しい、複数のもの・ことから最適解を選択・判断できない等の認知機能のトラブルが考えられる。



移動の場面で…「階段を下りるのが怖い」

そこに段差があるとわからず、自分の足をどのくらい前に動かせばいいかわからなくなる。この背景には、自分の身体や空間認知が難しくなる、細かい色の差異の識別、形や大きさの認識が難しくなる等の認知機能のトラブルが考えられる。



調理の場面で…「調理時間がわからない」

パスタを10分茹でるとわかっていても、10分がどのくらいなのかが感覚的にわからず、茹ですぎてしまう。お肉を焼く時も同じで、焼きすぎて焦がしてしまったり生焼けになってしまう。この背景には、時間経過の感覚が乱れる・失われる等の認知機能のトラブルが考えられる。



買い物の場面で…「会計に時間がかかる」

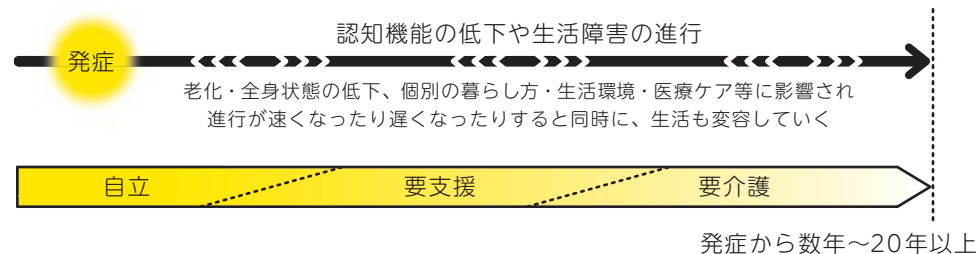
レジの表示を見ても、財布に目線を落とした瞬間に金額を忘れてしまう。「袋はご入用ですか？」と聞かれたり、クーポン券を渡されたりすると何をすればいいかわからなくなる。この背景には、見聞きしたことを忘れる、複数のことを同時に実行できない等の認知機能のトラブルが考えられる。

Point



認知症の人の症状や進行の度合いは人それぞれ。記憶障害がある人もいれば、空間の把握が難しい人もいて、一概に認知症の人はこうだと断言することはできません。また、その人の生活スタイル、これまでどう過ごしてきたかという背景によっても困りごとを抱える場面は一人ひとり違います。

● 症状や暮らしに合わせた製品・サービス開発の重要性



(作成：認知症介護研究・研修東京センター永田久美子)

認知症の症状は進行性ですが、いきなり進むのではなく、長い経過をたどります。これまでの生活を継続し、暮らしやすくしていくためには、そのときのその人の症状や暮らしに合わせた製品・サービスを活用し、社会機能（生活機能）を維持していくことが重要です。

発症後、要支援になるまで、要支援・要介護になってからも、自立できる部分があります。今後、認知症の人とともに日々の暮らしの中で使う製品・サービスの開発を進めていき、既存製品のデザインを少し変えることや新しい製品・サービスを生み出すことによって、一人ひとりが自立して自分らしい生活を続けていける可能性が広がることへの期待が高まっています。

認知症の人に関する関連団体

● 一般社団法人 日本認知症本人ワーキンググループ

認知症とともに生きる人が、希望と尊厳をもって暮らし続けることができ、よりよい社会をつくりだしていくことを目的として本人が主体的に活動している。「認知症とともに生きる希望宣言」を発表し、本人同士が出会い、つながり、暮らしや地域をよりよく変えていく「希望のリレー」活動や、企業が本人とつながるお手伝いも行う。(<http://www.jdwg.org/>)

● 公益社団法人 認知症の人と家族の会

全国 47 都道府県に支部を持ち、40 年近く活動を続ける団体。各支部では、「つどい」「会報」「電話相談」の 3 本柱の活動を進めるとともに、認知症への理解を広める啓発活動や行政への要望や提言も行う。(<https://www.alzheimer.or.jp/>)

● 認知症当事者支援者連絡会議

日本国内にある 4 つの認知症当事者団体（認知症本人、介護家族、その団体に関与する支援者）が連携して、認知症疾患・認知症ケアに対する啓発活動と情報提供を行う。(<https://ninchisho-renrakukai.com/>)

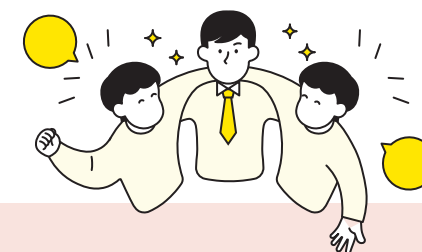
認知症に関する知識を深める機会

● 認知症サポーター養成講座

認知症高齢者等にやさしい地域づくりを目指し、認知症に対する正しい知識と理解を持ち、地域で認知症の人やその家族に対してできる範囲で手助けする「認知症サポーター」を養成する取り組み。(自治体事務局連絡先一覧 <https://www.caravanmate.com/office/>)

● 認知症介護情報ネットワーク

国の認知症施策の一端を担う重要な機関として設立された認知症介護研究・研修センターが運営しているサイト。認知症について正しく理解するための基礎知識をコラム形式で紹介する他、動画で認知症介護に関連する基礎的な知識を事例に基づいて学ぶ「知ってなるほど塾」を提供している。(<https://www.dcnet.gr.jp/>)



製作・発行・編集

日本認知症官民協議会 認知症イノベーションアライアンスワーキンググループ

・事務局：経済産業省・株式会社日本総合研究所

・デザイン：特定非営利活動法人イシュープラスデザイン

発行 2023年3月（2025年3月改訂）